認知症グループホーム 認知症グループホームくつろぎ

1 基本方針

認知症になっても入居者一人ひとりが個人として尊重され、住み慣れた地域の中で築いてきた暮らしを大切にしながら、その人らしく生活できることを目指す。

2 利用者の状況（令和6年3月31日現在）

（1）入退所の状況

定員	前年度末 利用者数	令和5年度中の入退所状況						利 用 延人員	年間平均 稼働率	年 度 末 利用者数
		入所	退所	退所理由別						
				家庭 復帰	施設 移管	契約解除 (入院等)	死亡			
9人	9人	5人	5人	0人	2人	1人	2人	3,109人	94.38%	9人
4年度 9人	9人	1人	1人	0人	1人	0人	0人	3,223人	98.11%	9人

（2）利用者の介護度別人員

性別	要介護1	要介護2	要介護3	要介護4	要介護5	計
男 性	1人	0人	2人	0人	0人	3人
女 性	0人	4人	0人	2人	0人	6人
計	1人	4人	2人	2人	0人	9人

（平均介護度2.5）

3 事業の実施状況

（1）専門的ケアの実施と個別支援

ア 4月定例会議において、認知症を正しく理解した上で、私達がどのような視点に関わり混乱しない安心した生活を支えることができるのか基本的な考え方の研修を実施した。認知症フォーラムに1名参加し、認知症を発症された本人の言葉を講演で直接聞き、本人のつらさや苦勞、どのような支援が生きる自信に繋がるのか復命研修を通し皆で考える機会を設けた。

イ 事前情報、会話を通しこれまで培ってきた人生の中からその人らしい生活に視点を置き、自らが日常生活の中でできる能力を発揮し、「できる自信」に繋がるためのアセスメント力の向上と支援に努めた。

ウ 「快」に着目した支援として、「嬉しい、楽しい」などポジティブな感情が持続できるような活動支援や日常生活の声のかけ方など工夫し精神的なQOLの向上に取り組んだ。ユマニチュードの手法の実践を継続し、表情（安心できる笑顔）、声のトーン、身体への触れ方など言語コミュニケーション、非言語コミュニケーション力の向上に取り組み心理的安定が図れるよう努めた。

エ 毎日の体操、四字熟語、ことわざ、鳥取市内の地名の読み方（呼び方）など肺活量や腹式呼吸を活用した大きな声を出す訓練、思い出しながら読み上げる記憶持続訓練、上下肢機能維持等筋力の低下や認知症の進行による重度化傾向に対応した健康管理に努めた。かかりつけ医往診の際には、病気の相談だけではなく日常生活についても情報を共有し、異常サインの早期発見に努めている。緊急時対応事前意向確認書の更新実施。第三者評価11月受審修了。

(2) 職員の資質向上と人材育成

ア 定例職員会議、職員研修会において、理念、基本方針、人権、コンプライアンス、事業計画、認知症対応型施設としての取り組みの考え方、方向性を伝え支援に対する専門意識の向上を図った。

認知症専門研修として、「認知症ケアの専門性を理解する」動画講座、「認知症・身体拘束」動画講座、認知症フォーラム復命研修「認知症になってからのセカンドストーリーわたしからあなたに伝えたいこと」実施、あいサポート研修復命実施した。認知症介護実践者研修1名受講。

精神的ケア研修「対人援助のためのマインドフルネス」、接遇研修「入居者との向き合い方」について研修実施した。

イ 出張研修が組みにくいため、いつでも視聴できる動画視聴により専門講師から知識や技術を学べる機会を設け自己研鑽や職場研修として活用した。

(3) 地域社会との連携と認知症理解への取り組み

ア 運営推進会議2ヶ月毎に開催し今年度6回(4月6月8月10月12月2月)実施し委員よりご指導・助言を頂き運営に反映させた。特にヒヤリハット発生内容に関する質問やくつろぎでは必要以上の睡眠導入剤が処方されていないかについて、身体拘束の範囲として取り上げていることへの着目など他法人との違いに注目があつた。本人の症状を主治医と情報共有を図り、日中活動に影響がない適切な量か、介護の手に合わせた服薬量になっていないかという点検は入居者の日中活動を支える視点から身体拘束に関する内容である事を説明した。

イ 地域交流

- ・2週間に1度、移動スーパー「とくし丸」による買い物・移動図書館の活用
- ・末恒公民館祭への作品出展・鳥取市湯所「最勝院」による法話交流会(毎月)
- ・ミュージックケア(毎月)などのボランティア受け入れ4月より開始した。
- ・中ノ茶屋一人住まい高齢者9件へ、和菓子を作り自治会長の協力で届けて頂いた。
- ・地域の洋菓子店へ買い物外出・ショッピングセンターや観光地への外出
- ・福祉学校実習生の実習受入れ1名
- ・生け花ボランティアを予定したが日程調整がつかず未実施であるが次年度は取り入れたい。

ウ 一人ひとりの生活の様子が分かりやすい、「くつろぎ便り」を毎月発行し家族の安心に繋げていった。

盆・正月の外泊 感染対策を家族と打ち合わせを行い自宅で家族と過ごして頂いた。

(1件)

短時間一時帰省、身体に負担のかからない範囲など家族と打ち合わせを行い、帰宅して法事、墓参りに行かれた。(1件)

家族の長期宿泊 一週間くつろぎに宿泊され、同じ部屋で一緒に過ごされた。(1件)

エ 各災害に備えて、火災想定訓練、地震想定訓練、緊急通報訓練(緊急連絡網・メール通信)緊急時対応訓練、近隣施設伏野つばさ園との合同防災訓練を実施した。

オ 県営住宅末恒第一団地 高齢者見守りサービス 6月30日より協力開始した。

(4) 経営基盤の確立

ア 日々の健康管理と早期対応に努め、稼働率の安定に努めているが、既往による症状の進

行など免れない入院、退所等により稼働率97.75%となった。近年の入所申込み傾向が、先を見越して準備をしておくという申込みに変わってきており、事前面接に入る段階で、本人の理解やもう少し家でみたいという家族の思いなど判断を頂くまでに時間がかかり空所期間が延びてしまうケースが重なってしまった。

- イ 新型コロナウイルス罹患者0名 インフルエンザ罹患者0名
感染対策情報提供や研修を実施した。

(5) 労働環境の整備

- ア 月1回安全衛生委員会において、健康・環境面などの視点から産業医の助言を受け、働きやすい職場環境について協議し安心して働けるように努めた。ストレスチェックを実施し、個々のストレスや集団のストレスの傾向の把握を行った。

「ハラスメントの理解と対応」「良好な職場環境の為のヒント」研修実施により心身の健康管理のサポートに努めた。また、個別面談、相談などにより理解者のいる安心した環境作りに努めストレスの軽減を図った。

- イ 勤怠システムを活用した労働時間管理と業務の効率化、業務負担の軽減、時間外勤務軽減を推進し労働環境整備に努めた。

I C Tの活用 位置情報確認システム G P S見守り機器導入し活用している。

4 実習、ボランティアの受入状況

(1) 実習の受入実績

実習受入先	受入期間	実人員	延人員
社会福祉士相談業務（高齢者施設）実習	3月	1人	2人
計		1人	2人

(2) ボランティアの受入実績

- ・法話1名（毎月）
- ・ミュージックケア2名（毎月）

（計：延べ 22人）